

2025（令和 7）年度 伊賀市立霊峰中学校

いじめ防止基本方針

1 いじめの防止等に対する基本的な考え方

（いじめの定義）

「いじめ」とは、生徒等に対して、当該生徒等が在籍する学校に在籍している等、当該生徒等と一定の人間関係にある他の生徒等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった生徒等が心身の苦痛を感じているものをいう。

- ① いじめには多様な態様があることから、法の対象となるいじめに該当するかどうかを判断するに当たり、「心身の苦痛を感じているもの」との要件が限定して解釈されることのないようにする。例えば、いじめられていても本人がそれを否定する場合が多々あることから、いじめを受けた生徒本人や周辺の状況等を客観的に確認したり、当該生徒の表情や様子をきめ細かく観察したりするなどして確認する。
- ② 「物理的な影響」とは、身体的な影響のほか、金品をたかられたり、隠されたり、嫌なことを無理矢理させられたりすることなどを意味する。「けんかやふざけ合い」であっても、見えない所で被害が発生している場合があるため、背景にある事情の調査を行い、生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する。
- ③ いじめを受けた生徒の立場に立って、いじめに当たると判断した場合にも、その全てが厳しい指導を要する場合であるとは限らない。例えば、好意から行った行為が意図せずに相手側の生徒に心身の苦痛を感じさせてしまったような場合や、軽い言葉で相手を傷つけたが、すぐに生徒が謝罪し教職員の指導によらずして良好な関係を再び築くことができた場合等においては、「いじめ」という言葉を使わずに指導するなど柔軟に対応する。ただし、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当するため、事案を学校いじめ対策組織へ情報共有する。

（いじめ防止等に関する基本理念・学校としてのいじめ問題についての考え方）

「いじめは、いじめを受けた生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがある。」また、「いじめは、どの学校、どの学級でも起こりうるものであり、どの生徒も被害者にも加害者にもなりうる。」という基本認識を本校全教職員が持ち、生徒の尊厳が守られ、生徒をいじめに向かわせないための未然防止や早期発見等のための対策を行う。

（いじめが「解消している」と判断するための要件）

① いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも 3 か月を目安とし、さらに長期の期間が必要であると判断される場合は、学校の設置者又は学校いじめ対策組織の判断により、より長期の期間を設定するものとする。

② 被害生徒が心身の苦痛を感じていないこと

被害生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。学校は、いじめ解消に至っていない段階では、被害生徒を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保する責任を有する。

いじめが「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、当該いじめ被害生徒及び加害生徒については、日常的に注意深く観察する。

2 学校におけるいじめの防止等の対策のための組織

(1) 霊峰中学校いじめ防止対策委員会

いじめ防止等の措置を実効的に機能できるよう、管理職、生徒指導担当、人権教育担当、道徳教育担当、各学年主任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、いじめ問題相談員、県・市から派遣されるスクールカウンセラー、および、いじめ問題相談員・P T A役員による「いじめ防止対策委員会」を設置する。

(開催時期) 各学期1回(生徒の実態に応じて)

(機能) いじめ問題に関わる年間計画を作成と進捗の検証を行う。
いじめ防止に関する取組の検証を行う。
いじめ事案に対する対応の検討を行う。
教職員の資質向上のための校内研修を行う。

3 学校におけるいじめの防止等の対策のための具体的な取組

(1) いじめの防止

ア マニフェスト、学校経営方針から

- ・生徒一人ひとりをみつめ、個に応じた指導の徹底
- ・教育相談の計画的な実施と問題の早期発見と指導

イ 人権・同和教育の取組、仲間づくりの取組

- ・差別をなくそうとする意欲と実践力の育成
- ・互いを認め、尊重し、つながりあう機会として「霊中のつどい」を実施

ウ 社会性やコミュニケーション能力の育成

地域のいろんな人をゲストティーチャーとして招き、人と人とのつながりの大切さや人権の大切さを学ぶ。

エ 自尊感情・自己有用感・自己肯定感の育成

互いの良さに気付く取り組みを行い、自尊感情を高める。

オ 生徒会の取組

- ・自主的な生徒会活動の育成と支援
- ・特別活動、部活動の活性化と充実及び仲間意識の高揚とリーダーの育成

カ いじめ問題に関する教職員の資質向上

いじめ防止等のための対策に関する本校における教職員の資質能力の向上に必要な研修を実施する。

キ 保護者・地域・いじめ問題相談員との連携

生徒アンケートやQ U調査をもとに学期ごとに子どもの実態について協議する場を持つ。
また3名のいじめ問題相談員と連携をとりながら、いじめ相談体制の確立に努める。

(2) いじめの早期発見

ア いじめについてのアンケート調査の実施

- ① 生徒対象 年3回(5月、9月、1月)
- ② 保護者対象 年1回(10月)

※調査当日に何らかの理由により欠席した児童生徒については、後日、調査を実施する。

長期欠席者等については、家庭訪問などにより、きめ細かな状況の把握に努めるなど、十分配慮して実施する。(アンケートの実施が困難な場合については、個別の聞き取り調査により状況の把握に努めるなど、児童生徒の状況を十分に考慮して実施する。)

アンケートの保存期間は、実施年度の末から3年間とする。

イ 教育相談の実施

生徒及び保護者がいじめに関わる相談を行うことができるよう、次のとおり相談体制の整備を行う。

- ① 担任等による日常的な教育相談 年3回（6月、10月、2月）
- ② スクールカウンセラーやいじめ問題相談員の活用
- ③ ふれあい教室・市青少年センター等、相談窓口の活用

ウ 日常的な生活ノート・日記帳、家庭訪問

エ 教職員の情報共有体制

月1回全教職員で問題傾向を有する生徒について、現状や指導について情報交換、及び共通認識を図る。

オ インターネット等を介して行われるいじめの対策

インターネット等を通じて行われるいじめの防止、また、生徒及び保護者が対処できるように、外部講師を招聘する等、情報モラルに係る研修会を実施する。また、児童生徒のネットリテラシーや情報モラルを育む教育を推進する。

（3）いじめに対する措置

ア いじめ問題にかかわる生徒の安全確保

いじめを発見・通報・相談を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに組織的に対応する。被害生徒を守り通すとともに、教育的配慮の下、毅然とした態度で加害生徒を指導し、再発を防止する措置をとる。また、いじめを知らせてきた生徒の安全も確保する。状況によっては、スクールカウンセラー、SSW等を活用し、生徒の気持ちを和らげる。

イ 教職員の情報共有体制（職員会議、校内研修）、組織対応体制の確立

いじめの発見・通報・相談のあった場合、霊峰中学校いじめ防止対策委員会において情報を共有する。その後、速やかに関係生徒から事情を聴き取るなどをして、いじめの有無の確認を行う。さらに、いじめの根本的な解決に向けた方策を構築し、取り組む体制をつくる。またいじめが認知された際、被害・加害の生徒たちだけの問題とせず、学校の課題として解決を図る。

ウ 保護者への連絡と支援・助言

いじめが確認された場合は、保護者に事実関係を伝え、いじめを受けた生徒とその保護者に対する支援や、いじめを行った生徒の保護者に対する助言を継続的に行う。また、いじめ事案に関する事実関係その他の必要な情報を適切に提供する。指導にあたり学校は複数の教職員が連携し、組織的にいじめを阻止しその再発を防止する措置をとる。

エ 関係機関・専門機関と連携

いじめを確認した状況について、校長が伊賀市教育委員会に報告する。いじめ事案の状況により、関係機関・専門機関との連携を図る。

4 重大事態への対処

（1）重大事態に対する調査

いじめにより、生徒の生命・心身または財産に重大な被害が生じた疑いや相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき、緊急のいじめ防止対策委員会を開くとともに教育委員会の指導・助言の下、事実関係を明確にするための調査を実施する。（生徒や保護者からいじめにより重大事態に至ったという申し出があった場合も含む）

また、法に抵触すると考えられる場合は、伊賀警察署に通報し、対応等の相談を行う。

（2）調査結果の提供及び報告

調査結果については、教育委員会に報告するとともに、いじめを受けた生徒及びその保護者に対し、事実関係その他の必要な情報を適切に提供する。